学校名	川俣町立川俣中学校	校長名	島貫　条司		
住　所	伊達郡川俣町字宮ノ脇１４	生徒数	３３３	学級数	１４
ＴＥＬ	０２４－５６６－４１１１	ホームページアドレス	なし		

話し合い活動を取り入れた教科指導の工夫

1　少人数指導の計画

(1)　少人数学級編制と少人数指導のよさを生かし、個人ごとの課題解決に向けて一人一人のニーズを把握し、学習や生活についてきめ細かく対応し、指導の成果を上げる。

(2)　少人数学級編制のよさを生かして、緊密な人間関係を構築し、学校生活不適応生徒の改善を図る。また、落ち着いた学習環境のもと、学習指導の充実を図り、成果を上げる。

2　少人数指導の具体的な方策

授業の課題解決や話し合い活動の場面において、積極的にグループ活動などの少人数指導を行う。また、さまざまな学習場面において、生徒の理解の程度や学習速度に応じたきめ細かな指導を行い、学力の向上をめざす。

3　実践の概要

(1)　本校研究主題より

今年度、本校では「気づき、考え、表現する生徒の育成～教師の適切な指導による話し合い活動の充実を通して～」を研究主題に掲げている。中教研県大会発表に向けた特別活動の強化という視点も含めた主題設定である。

研究主題における手だては、①「ねらいの明確化」、②「話し合い活動の充実」、③「ねらいに沿った振り返りやまとめの充実」の３点である。このなかで、とくに②の話し合い活動の充実に向けては、少人数学級編制のよさを生かしながら、話し合う視点を明確にしたり、自分の考えや立場を明確にしたりする等、班活動を充実させる指導が重要なポイントとなる。以下具体的な実践について述べる。

(2)　実践Ｉ［１年数学（遠藤　隆幸教諭）の実践］

①　単元名　方程式

②　本時のねらい

等式の性質を用いた解法から、移項という見方に発展させることにより、方程式を一定の手順によって解くことができる。

③　研究主題との関わり

本時は、個人で自分の考えをもたせたうえで、班での話し合い活動を充実させながら等式の性質を数学的な根拠にして説明させることで移項という考えに気づかせる。

④　指導過程　課題解決の場面

学習活動	時間・形態	□指導上の留意点　◇評価
３　移項の原理について考える。 (1) 個で考え、ワークシートに書く。	５分 個	□　５Ｘ＝６＋４Ｘの右辺にある４Ｘの項を左辺に移動するというイメージをもたせ、その際には符号を変えればよいことに気づくよう支援する。
(2) 班で考えを共有し、移動する際に注意する点をホワイトボードにまとめる。	10 分 班	
(3) 班の発表を通して、等式の性質を根拠に、項の符号を変えて移動することができることに気づく。	10 分 一斉	◇　等式の性質を使うと、等式の一方の辺の数または、式を符号を変えて他の辺に移すことがわかる。（観察）

⑤　その他（指導上の工夫点）

本校で話し合い活動を行う際に、ホワイトボードを活用している。まず、個で考える時間を十分に取る。その後、班で話し合う際に、互いの意見を可視化したり、班としての考えを練り上げたりするためにホワイトボードは有効である。

(3) 実践Ⅱ［２年英語（齋藤由佳子教諭）の実践］

① 単元名　Unit4　Homestay in the United States

② 本時のねらい

自分自身の家庭内での役割や家庭生活を送るうえで大切なことについて、「(don't) have to ＋動詞の原形」の表現を用いて書くことができる。

③ 研究主題との関わり

インタビューの結果を個でグラフと英文にまとめさせた後、班ごとに協力してより正確な英文を検討、作成することでコミュニケーションの育成を図る。

④ 指導過程　課題解決の場面

学習活動	時間・形態	□指導上の留意点　◇評価
3　家庭内の役割についてまとめる。 (1) 家庭内の役割について自分のことを英文でまとめる。	5分 個	□　与えられた項目について「(don't) have to ＋動詞の原形」を用いて英文で書かせる。
(2) 家庭内の役割について友達にインタビューする。	5分 個	□　班ごとにインタビューする項目を分担する。班のなかでインタビューする友達を分担する。
(3) インタビューした結果をグラフと英文にまとめる。	15分 個・班	□　インタビューの結果を班で協力してグラフや英文にまとめ、発表できるようにする。
(4) まとめた結果を発表する。	10分 一斉	◇　「(don't) have to ＋動詞の原形」を用いて、家庭内での役割やインタビューの結果を英文で書くことができる。

4　実践の成果と課題

(1) 成果

○　課題解決の場面で少人数の班活動を積極的に取り入れたことにより、多様な視点で物事を見ることができるようになった。また、教え合いにより、得意な生徒はさらに理解を深め、苦手な生徒は少しでも先のステップへと進むことができた。

○　教科指導において班活動を継続することにより、学級活動や委員会活動などの特別活動においても、より深い話し合いを行うことができるようになった。

(2) 課題

●　さまざまな調査を分析すると、本校生徒の学力の実態として二極化の傾向が見られる。班活動の積極的な取組は一定の成果があるものの、二極化を解消するには至っていない。今後は、授業のなかでコース別の課題学習など基礎基本の定着を図るような少人数指導の実践が課題である。